昭和62年度　厚生省心身障害研究
周産期をめぐる諸問題に関する研究

岡山県におけるＮＩＣＵ長期入院例の実態

五十嵐　郁子
（国立岡山病院小児科）

研究目的

最近の新生児医療の進歩により，多くのハイリスク児が救命されるとともに、ＮＩＣＵの長期入院例が増加している。全国的な調査の一環として岡山県のＮＩＣＵにおける長期入院患者の実態を把握するのが目的である。

研究方法

岡山県下の病院の中で産科及び小児科を有する病院にアンケートを送り、ＮＩＣＵ或は未熟児室の長期入院例について調査した。対象は昭和61年１月より12月迄の期間に出生し、生後７日以内に入院した新生児で、90日以上ＮＩＣＵに入院した症例について、その疾患名、入院期間、長期化した原因、及び予後などについて調査した。

結果

岡山県内でＮＩＣＵお有し、新生児のintensive careを行っている病院は６施設で、これらの病院ＮＩＣＵにおける長期入院例の合計は31例である。６病院以外では該当する患者はないとの返事を得ており，又産科のみの病院においてハイリスク児のintensive careを行っている施設はないので、以上の31例で県下の全例と考えられる。

６病院のＮＩＣＵにおける１年間の入院数、死亡数、長期入院数、及びその比率は表１の如く

表１．岡山県内ＮＩＣＵの長期入院例数と率

昭和61年１月～12月　出生

NICUのある病院	総入院数	死亡数	長期入院数	長期入院の率
A	506	18	21	4.15%
B	310	14	3	0.97%
C	152	5	4	2.63%
D	115	10	2	1.74%
E	61	3	0	0
F	15	1	1	6.67%
合計	1,159	51	31	2.67%

である。ＮＩＣＵ全入院数に対する長期入院例の率は2.67％である。次に岡山県内の出生体重別の全出生数に対する長期入院例の比率を表２に示す。県内の昭和61年の出生数は21,934で長期入院例の率は 0.141％となっている。因みに県内の出生数に対するＮＩＣＵに入院の率は5.28％である。

表２．岡山県内出生数とＮＩＣＵ長期入院例の比率

出生体重	県内出生数	長期入院数	率
1000g 未満	38	11	28.9 ％
1000～1499	41	8	19.5 ％
1500～1999	197	2	1.02 ％
2000～2499	903	2	0.22 ％
2500g 以上	20,755	8	0.039％
合　計	21,934	31	0.141％
６病院ＮＩＣＵの入院数／県内出生数			5.28 ％

入院日令は０日に入院したものが28例で、他の３例も日令３以内に入院しており、出生直後より重症の症例が長期入院につながることがうかがわれる。

長期入院の原因となった疾患名は表３の如くで、超未熟児　先天異常が多数を占めている。

表３．ＮＩＣＵの長期入院例の疾患名と予後

疾患名、主なる処置	例数	自宅に帰る	小児病棟に移す	死亡
超未熟児	11	10		1
極小未熟児＋ＩＲＤＳ	8	8		
仮死後慢性呼吸不全（人工換気）	2		2	
先天性喉頭気管狭窄（人工換気）	1		1	
筋緊張性ジストロフィー（人工換気）	1		1	
先天性ミオパティー（人工換気）	1			1
慢性腎不全（腹膜透析）	1		1	
心奇形	3		2	1
消化管閉塞	2		2	
腹壁破裂	1		1	
	31	18	10	3

長期入院例の予後であるが、表３に示すとおり、未熟児19例では死亡１例を除き、すべて直接自宅に帰っている。成熟児は仮死後慢性呼吸不全２例以外はいずれも先天異常の症例で、合計10例がＮＩＣＵから小児病棟に移されている。先天異常の増加は今後の問題点と言えよう。

結　　語

長期人工換気例など自宅保育の不能なハイリスク児は将来増加する傾向になると考えられるが、ＮＩＣＵ内で長期careすることはＮＩＣＵ本来の機能に支障をきたすので、乳幼児用のベットを有する小児病棟に移すことが最も自然の形態であろう。しかしそれにはＮＩＣＵと一般小児病棟とが連繋を保って協力する態勢が必要である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

結語

長期人工換気例など自宅保育の不能なハイリスク児は将来増加する傾向になると考えられるが、NICU 内で長期 care することは NICU 本来の機能に支障をきたすので、乳幼児用のベットを有する小児病棟に移すことが最も自然の形態であろう。しかしそれには NICU と一般小児病棟とが連繋を保って協力する態勢が必要である。